『阿弥陀経』意訳

# 阿弥陀仏の世界
## ―極楽への教え―

わたくし阿難は、このように聞きました。

それは、お釈迦さまが祇園精舎におられた時のことです。お釈迦さまの前には大比丘と称される千二百五十人の修行者が座っておられました。みなお釈迦さまと同じように阿羅漢のさとりに達しておられ、みなその名をよく知られた方がたです。その中には、智慧第一の舎利弗さま、神通力第一の目連さま、質素な生活に徹した摩訶迦葉さま、教えを深く受けとめられたマカカセンネンさま、論議の名手マカクチラさま、一人静かに道を求められたリハダさま、掃除に徹したシュリハンダカさま、誘惑に負けない強い意志のナンダさま、いつもお釈迦さまの説法を聞いておられる阿難陀さま、お釈迦さまの子で人知れず徳を積まれたラゴラさま、牛の姿に似ているキョウボンハダイさま、ひとびとに広く説法されたビンヅルハラダさま、陽気で機知に富んだカルダイさま、星に詳しく勇敢なマカコウヒンナさま、病気をせず長寿第一のハックラさま、心の眼を開いたアドロダさまなどがおられました。また、智慧深い文殊菩薩、思慮深い弥勒菩薩、清らかなケンダカダイ菩薩、いつも修行されている常精進菩薩、お弟子や菩薩の他にも、悪をこらしめる帝釈天をはじめとした仏法を護る神々もおられました。ほかにも、お釈迦さまの説法を聞くために大勢がその場におられました。

この意訳を引用・転載する場合は、日付を明記してください。
インターネット上への転載はご遠慮ください。
藤場 俊基［二〇〇四年十月二十日版］

**祇園精舎**（ぎおんしょうじゃ）

『阿弥陀経』説法の舞台である祇園精舎は、釈尊の時代、コーサラ国の首都舎衛城の町はずれでした。

舎衛城に住む須達多という大商人は、常に孤独な者や貧しい者に慈善を施すので給孤独（孤独な者に衣食をあたえる）長者と呼ばれていました。彼はマガダ国でたまたま出会った釈尊に深く帰依し、何とか舎衛城に釈尊を招こうと、精舎の建設を思い立ちました。

その最適な場所として選んだのは、波斯匿王の王子祇陀が所有するマンゴー樹の園でした。スダッタの必至の願いにもかかわらず、王子は応じませんでした。ところがあまりの熱意に、ついに王子は、金貨を庭園に敷き詰めることができたら、その広さだけ譲ってもよいと、約束しました。そこでスダッタは家屋を売り払い、全財産を金貨に代えて、一枚一枚、樹園に敷き始めました。このスダッタの熱意と真剣さにギダ王子はいたく感動し、とうとう樹園を寄付し、広大な精舎が完成したということです。

『阿弥陀経』にみえる「祇樹給孤独園」は、祇陀王子の樹園（祇樹）・給孤独長者の園（給孤独園）という二人の名を冠した名称です。それを略して「祇園精舎」と呼ばれるのです。

その時、お釈迦さまは、いつもとは違って、どなたのお尋ねもないのに、ご自分から口を開かれ、長老の舎利弗さまに問いかけられました。

舎利弗よ、これより西方のはるか遠くに、世界があり極楽と名づけられている。そこには仏さまがおられ、阿弥陀仏と名のられている。そして現に今そこで法を説かれている。

舎利弗よ、その国はなぜ極楽と名づけられるのだと思うか。その国の衆生には苦しみがなく、ただ楽しみだけを受けるからである。

舎利弗よ、極楽の世界は、七重の垣にかこまれ、七重の薄網におおわれ、七重の並木がある。これらは、金・銀・瑠璃（るり）・水晶などの宝石がちりばめられ、四方にめぐらされている。

舎利弗よ、極楽には宝の池があり、八つの功徳のある水があふれている。池の底には、金の砂がしきつめられ、四方の水ぎわには、金・銀・瑠璃・水晶などの宝石でできた階段がある。そばには高い建物があり、金・銀や色とりどりの宝石でみごとに飾られている。池の中には、車輪ほどもある大きな蓮華が咲いている。それらの花はおのおの光をはなち、青い色は青く輝き、黄い色は黄色く輝き、赤い色は赤く輝き、白い色は白く輝いている。また美しく清らかにな香りをただよわせている。舎利弗よ、極楽世界は、その功徳がこのような荘厳（すがた）となって成就している。

舎利弗よ、その仏（みほとけ）の国では、いつも天から優雅な音楽がかなでられ、大地は黄金色に輝き、一日に六回、曼陀羅（まんだら）の華が降りそそいでくる。その国の衆生（ひとびと）は、すがすがしい朝をむかえると、花かごに花を盛り、無数の国の仏（みほとけ）がたを供養する。それが終るとちょうど食事時となり、もとの国にかえり、食事をすませて散策し思索する。舎利弗よ、極楽世界は、その功徳がこのような荘厳（すがた）となって成就している。

舎利弗よ、その世界にはさまざまな形や色の鳥が飛びかっている。清楚な白鵠（びゃっこう）、華麗なクジャク、可愛いオウム、おしゃべり上手なシャリ、声の美しいカリョウビンガ、共なる命を生きる共命鳥（ぐみょうちょう）などである。これらの鳥は、一日に六回、おだやかな声で鳴く。そして、その鳴き声は、教えのことばのように聞こえてくる。その国の衆生（ひとびと）は、その声を聞くと、仏・法・僧の三宝を念（おも）う気持ちが自然におこってくる。

**智慧第一の舎利弗**（しゃりほつ）

あるとき釈尊に「神通第一の目連より智慧第一の舎利弗のほうが勝（まさ）っているのでしょうか」と尋ねました。このいい方からしますと、あるいは、人々の目には目連よりも舎利弗のほうが智慧において優れているということに疑いをもっていたのかもしれません。その疑問に答えて釈尊は、二人の過去世での話を語ってきかせられます。

ある町で、二人の画家がたがいに技を競いあっていました。あるとき、国王が二人の優劣を決めようと、それぞれ得意の絵を描くように命じられました。一人の画家は直ちに製作にとりかかり、六ヶ月後みごとな絵を描きあげました。ところがもう一人の画家は少しも絵を描かず、ひたすら壁をみがいてばかりいました。やがて見にこられた王は、はじめの画家の絵のみごとさにふかく感服されました。ついで、反対側に描かれてあるもう一人の画家の絵をご覧になりました。それは最初の画家の絵よりももっとふかみのある、すばらしい絵でした。王が感嘆しておられると、その画家が静かにすすみでて申しました。

「これは私が描いたものではありません。わたしはただ壁をみがきあげただけなのです。その壁にあの画家の描かれた絵がうつっているのです。ですから、これが美しいとしたら、それは向い側の絵がすばらしいからです」　その言葉に王はいよいよ感服されたということです。

その話をされた釈尊は、絵を描いたのが目連、ひたすら壁をみがいていたのが舎利弗であった、とつけ加えられています。……

つまり舎利弗の智慧は、あらゆるものの美しさをひきだし、うつしだすまでに、その壁（心）をみがきつくされたものであったのです。わが才能を表にあらわし、誇るものではなく、逆に一人一人の才能をほめたたえ、その尊さを一人ひとりに気づかせる力であったのです。

（宮城顗『仏弟子群像』四一頁

舎利弗よ、なぜ畜生である鳥が極楽にいるのか不思議に思うかもしれないが、これらの鳥は、罪の報いによって畜生に生まれたわけではない。極楽世界には、そもそも地獄の苦しみも、餓鬼の悲しみも、畜生の迷いもない。舎利弗よ、そこには地獄・餓鬼・畜生という言葉すらない、ましてや、罪の報いとして畜生道におちた鳥がいるはずはない。これらの鳥は、すべて阿弥陀仏が、ひとびとに教えをすすめるために、生み出した仮の姿である。

舎利弗よ、その世界には、ここちよい風がそよいでいる。その風に吹かれて、宝の樹や宝の網はゆれ動き、百千の楽器が同時にかなでるように、妙なる音が出ている。この調べを聞くものは、みな、仏・法・僧の三宝を念ずる心が自然におこってくる。舎利弗よ、極楽世界は、その功徳がこのような荘厳となって成就している。

舎利弗よ、その仏は、なぜ阿弥陀と名のられるのか。舎利弗よ、その仏から発せられる光明は量り知れず、すべての国々を照らし、その光をさまたげるものは何もない。だから阿弥陀（無量光）と名のられるのである。また、舎利弗よ、その世界の衆生の寿命は仏と同じである。どのようにしても量りつくすことはできない。このことから、阿弥陀（無量寿）とも呼ばれるのである。舎利弗よ、阿弥陀仏が仏となられてから、すでに、十劫というはかり知れない時を経ている。

また舎利弗よ、その仏には教えを聞く弟子が多くおられ、みな阿羅漢のさとりに達している。仏になろうと修行する菩薩も多く、それらの数は数えきれない。舎利弗よ、極楽世界は、その功徳がこのような荘厳となって成就している。

舎利弗よ、極楽世界に生まれようとしている衆生は、みな二度と迷いの世界に戻ることはない。中にはまもなく仏となられる菩薩もたくさんおられる。その数は数えきれなく、無量無辺としかいいようがない。

舎利弗よ、今説いた極楽世界と、阿弥陀仏、あるいは菩薩や聖者たちのことを聞いた衆生は、だれもがみなその世界に生まれたいという願いが発るにちがいない。なぜなら、このようなすばらしい方がたと同じところいることができるからである。

舎利弗よ、多少の善行や、功徳を積み重ねたとしても、それによって極楽世界に生まれることができるわけではない。極楽に生まれるためには人間が行なう善行や功徳は何の役にも立たない。ではどうしたら極楽に生まれることができるのか。舎利弗よ、老いも若きも男も女も、阿弥陀仏の説法を聞いて、その名をしっかりと心にとどめて、一日か二日でも、あるいは六日でも七日でも、迷うことなく一心に心を乱さず、「南無阿弥陀仏」とその名を称えるならば、その人が命終わろうとするときに、阿弥陀仏は菩薩や聖者がたとともに、必ず目の前に現われてお迎えしてくださるであろう。その人は、心が乱れることなく安らかに最後の時をむかえ、そしてすみやかに阿弥陀仏の極楽世界に往生することとなる。

舎利弗よ、わたしがこのような説法をするのは、この念仏の教えにはすばらしい利点があることをよく知っているからである。この念仏の教えを聞けば、だれでもきっとその世界に生まれたいという願いが発り、必ずその世界に生まれるであろう。

舎利弗よ、わたしは、阿弥陀仏の不可思議な慈悲と智慧の功徳をほめたたえてきた。これと同じように、

東方におられる、阿閦鞞仏、須弥相仏、大須弥仏、須弥光仏、妙音仏、

南方におられる、日月燈仏、名聞光仏、大焔肩仏、須弥燈仏、無量精進仏、

西方におられる、無量寿仏、無量相仏、無量幢仏、大明仏、宝相仏、浄光仏、

北方におられる、焔肩仏、最勝音仏、難沮仏、日生仏、網明仏、

下方におられる、師子仏、名聞仏、名光仏、達摩

仏、宝幢仏、持法仏、
上方におられる、梵音仏、宿王仏、香上仏、大焔肩仏、雑色宝華厳身仏、娑羅樹王仏、宝華徳仏、見一切義仏、如須弥山仏
などの全世界のガンジス河の砂の数ほどの諸仏がたが、うそ偽りではない証である広く長い舌を出して世界を覆いつくし、真実の言葉を説き広めるであろいう。そうすれば、あなた方はきっとこの『阿弥陀仏の不可思議な慈悲と智慧をたたえ、一切の諸仏に護られる経』を信ずるにちがいない。
舎利弗よ、なぜこの教えが『一切の諸仏に護られる経』と名づけられるのか。舎利弗よ、老若男女を問わず、どのような人でも、阿弥陀仏の名と、この経の名を聞けば、その人は一切の諸仏に護られ、二度と迷いの苦しみの中にさまようことがなくなるからである。舎利弗よ、そしてこの場にいるすべての者たちよ、わたしがここまで意を尽くして語り、全世界の無数の仏が口をそろえてほめたたえ、説き広めようとするこの教えを信ずることにもはやためらいはないであろう。
舎利弗よ、阿弥陀仏の世界に生まれたいとの願いが、すでに発った人、あるいは今その思いが発っている人、さらにはこれから発るであろう人は、だれもがみな二度と迷いの苦しみの中にさまようことはない、その世界に、すでに生まれており、今生まれつつあり、必ず生まれることになるのである。舎利弗よ、老若男女を問わず、わたしの言葉を信ずる者はだれでも、願いが発こり必ずその世界に生まれるであろう。
舎利弗よ、わたしが阿弥陀仏をたたえる諸仏の功徳を称讃したのと同じように、諸仏もまたわたしの功徳をたたえて言うであろう。「釈迦牟尼仏よ、あなたはだれもがなしえない困難な仕事を成しとげられました。それは、時代が作り出す濁り、自分の考えにとらわれる濁り、煩悩にふりまわされる濁り、人と人とのつながりの濁り、命をまっとうできなく

なる濁り、この五つの濁りが渦巻く現実の世の中で、迷いを離れる道を明らかにされたことです。そしてすべての衆生(ひとびと)のために、世間の人にはとても信じられない教えを説かれました。それが念仏往生の道です」と。

舎利弗よ、これではっきりしたであろう。わたしは、五つの濁りが渦巻くこの世の中において、困難な歩みを成就して、ようやく迷いを離れる道を明らかにしたのである。そして今、その歩みの結晶ともいえる、この信じ難い教えを、一切の世間の人のために説いた。この教えを自分自身に引き当てて受けとめることははなはだ難しい。これほど難しいことはない。

---

お釈迦さまが、このように説きおわると、舎利弗さまをはじめとするお弟子がたや、闘いを好む阿修羅(あしゅら)など、その場にいた衆生(ひとびと)は、その説法を心から喜び、そしてしっかりと胸に刻み込んで、礼拝して、その場を立ち去りました。

## 阿弥陀仏の世界
### ―極楽への教え―